HigoBank

News Release

平成 29 年 10 月 12 日

肥後の里山ギャラリー
「坂本善三美術館展」開催について

当行と「公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金」は、肥後銀行本店 1 階の肥後の里山ギャラリーにて、下記のとおり企画展を開催しますので、お知らせいたします。

記

１．名　　称　　「坂本善三美術館展　没後 30 年　坂本善三－抽象への道―」

２．会　　期　　平成 29 年 10 月 16 日（月）～11 月 25 日（土）　休館日：日曜日、祝日

３．会　　場　　肥後の里山ギャラリー（肥後銀行本店１階　ＲＫＫ通り側）

住所：熊本市中央区練兵町 1 番地、TEL：096-326-7800

開館時間：9：30～16：30、入場料：無料

４．見どころ　・1970 年代に「グレーの画家」「東洋の寡黙」と呼ばれ、黒灰色を基調とした作品で知られる坂本善三の没後 30 年を記念した展覧会

・阿蘇郡小国町の「坂本善三美術館」に所蔵されている絵画約 20 点を、時代ごとに展示

５．催　　事　　ギャラリートーク

日時：10 月 28 日（土）、11 月 18 日（土）両日 13：30～14：10

講師：肥後の里山ギャラリー　学芸員

内容：坂本善三の作風を時代ごとに解説

詳細は別添チラシをご覧ください。

以上

＜本件に関するお問い合わせ＞
肥後の里山ギャラリー
担当　村田・小堀
TEL　096-326-7800

《形》1982年

坂本善三美術館展

Collection from the SAKAMOTO ZENZO MUSEUM OF ART

没後30年
SAKAMOTO Zenzo

坂本善三

―抽象への道―

Concreteness to abstraction ― Alchemy of silence

平成29年10月16日(月)―11月25日(土)

肥後の里山ギャラリー

〒860-0017 熊本市中央区練兵町1番地(肥後銀行本店1階)
TEL 096-326-7800　FAX 096-326-7755
開館時間／9:30－16:30　休館日／日曜・祝日　観覧料／無料
主催:株式会社肥後銀行　公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金
協力:坂本善三美術館(阿蘇郡小国町)

■里山ギャラリーセミナー　「坂本善三と小国町－善三芸術を育んだ故郷・小国－」
10/7(土) 13:30－15:00　講師:山下弘子氏(坂本善三美術館学芸員)
会場:肥後の里山ギャラリー展示室
定員:60名(電話096-326-7800、FAX 096-326-7755、または受付にてお申込みください)

■ギャラリートーク
10/28(土)、11/18(土)
13:30－14:10
申込み不要

坂本善三美術館展

Collection from the SAKAMOTO ZENZO MUSEUM OF ART

没後30年 坂本善三 —抽象への道—

Concreteness to abstraction—Alchemy of silence

当ギャラリーでは、県内の美術館・博物館の収蔵品の一部をご鑑賞いただく、いわばサテライトミュージアム的な機能の展覧会を開催していきたいと考えています。今回この第1回展として、阿蘇郡小国町の「坂本善三美術館」の全面的なご協力を得て、没後30年「坂本善三—抽象への道—」展を開催いたします。

我が国を代表する抽象作家 坂本善三（1911-1987）は、黒灰色を基調とした作品で知られ、1970年代に「グレーの画家」「東洋の寡黙」と形容され、1980年代になるとフランス・パリの美術界でも高い評価を得て「沈黙の錬金術」(la alchimie du silence) と称されました。

没後、アトリエに残された遺作は生まれ故郷の小国町に寄贈され、当地の古民家を移築して建設された「坂本善三美術館」で保管、公開されています。坂本善三芸術の研究拠点として、その自然の懐に包まれた「坂本善三美術館」は、我が国でもおそらく類例のない畳敷きの展示室と居間での鑑賞スタイルが採られています。まさに熊本の自然や身辺の生活空間をその絵画美学の原点に据えた坂本善三芸術の総体を理解し、作品への親しみを深めるのに相応しい展示環境となっています。

▽

坂本善三は、上京、招集を経て戦後熊本に滞在し、阿蘇、横手、パリ、画津、戸島と生活拠点を変えながら、それぞれの時代、その場その場で自分の周辺をじっくりと見つめ、その生活環境や自然環境の中から多くの作品を生んでいきました。その過程の中、坂本善三にとって大きな画業の転換期となるヨーロッパ体験を経て、抽象絵画の領域に独自な画境を築いていくことになります。具象から抽象への転向は、自己体験に基づく絵画構造の発見と、日本的な精神の再認識によって着実に進められていきました。

坂本善三の抽象絵画を見るとき、そこにどこか共鳴を覚えるのは、坂本善三が最晩年に「すべて自然に任せておけばよい」と語っていたように、我が国の抽象化された自然、あるいは古くから受け継がれてきた日本人の心の形といったものが存在しているからでしょう。

本展は、坂本善三芸術が展開していく過程を、東京時代、阿蘇時代、横手時代、滞欧時代、画津時代、戸島時代の時代区分で振り返り、坂本善三芸術の魅力に迫ります。

私は小国杉に抱かれて育った。早春のセリつみ、ノビル取り。5月ともなれば野イチゴ、川魚取り。秋はクリ拾いやトリワナが待っていた。目を閉じればいつも、杉の中の山野をかけめぐっていた幼時の私の姿が浮かんでくる。つらかったフランス時代、いくど故郷の山河を思い出しては、自らを励ましたことか。

《花》1931年／東京時代

《阿佐ヶ谷風景》1932年／東京時代

《外輪山》1951年／阿蘇時代
一般財団法人杏仁会寄託

◆東京時代　1929—1945

私は当時、若い画学生を捉え始めていたフォーヴィスムに惹かれ、絵が変わってきていた。画壇ではシュルレアリスムの勢いが凄くなっていた。超現実派の絵は勿論、私を魅了する力があったし、私も若かった。だがこの自分は周りの現実すら、確かめることが出来ずにいるではないか。私は必死になってシュールの誘惑に耳を塞ぎ、現実のものを四つに取り組む姿勢を崩さなかった。

◆阿蘇時代　1945—1951

内牧の盆地の一角に、その頃私は一日中、立ち尽くすことがあった。まず大阿蘇を覆う空を見る。それから噴煙、山膚、山膚に続く山麓、木立ち、畑、そして私が立っている足もと。私は憑かれたようにいつも色や質量の変化を凝視し続けた。空から山、森を包んで自分の立っている地面、立っている背後にまで自然がある。絵の中にもそんな自然さがほしい。

◆横手時代　1952—1957

昭和26年になって、熊本市の医師の愛好者でつくっている杏美会から指導を頼まれた。そして杏美会の人たちの強い勧めで27年から熊本市の横手町に移った。私は借家の三畳の間をアトリエにして、ここで《耕す人》《出来事》のような200号を仕上げた。今思えば、こんな狭い所でよく描けたものだと思う。生活は阿蘇よりさらに苦しくなっていた。絵を売る、という点では熊本に居住しているのは不利である。東京なら都合のいいことは分かっていた。横手町の生活は、食べるのがやっとだった。30年頃、真剣に東京に出ることを考えた。そして出来れば、ヨーロッパに行ってみたかった。本場を知らずに、西洋画を描くことのむなしさを感じていたのも事実である。

《静物》1953年／横手時代

《出来事》1955年／横手時代

◆滞欧時代　1958—1959

《壁》1958年／滞欧時代
一般財団法人杏仁会寄託

パリに来た日本の絵描きが、まずやることは6，7号の小品を片っぱしから描くこと。それにルーブル見物である。私はしばらくボーッとなって、何も手がつかなかった。パリの構造に圧倒されたこともある。

3階建ての建物がある。日本ならこれが、実にもろい感じなのだが、パリの建築は3階でも、ガッチリとたっている。構造の厳しさ、美しさはヨーロッパに来てこの目で見なければわからない。私は建物ばかり描いた。建築物の構造を描くことで、具象からだんだん離れて行った。パリの建物は白と灰色を基調にしている。坂本調と言われる白と灰色の世界は、こうして私の内部で固まりつつあった。内牧で阿蘇を凝視し続けた勉強が、ここで大きくものを言った。

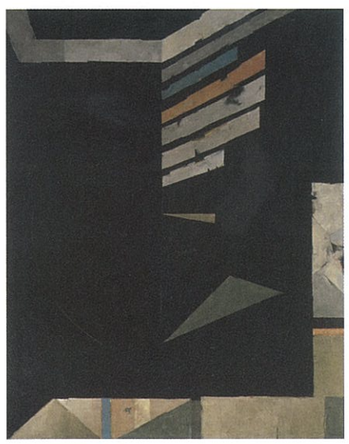
明治生まれのせいか、私は絵の修業と同時に、背中に日の丸をしょっている気持ちでいた。モデルに悪ふざけ一つ言わなかった。「ムッシュー坂本は紳士だ」とマダムにモデルが話しているのを聞いたことがある。モンパルナスのセバンという有名な画商に出入りしている友人の木村忠太が、私の絵を見て、フランスに残れと盛んに勧めた。残っていたら、どうなっていただろうか。

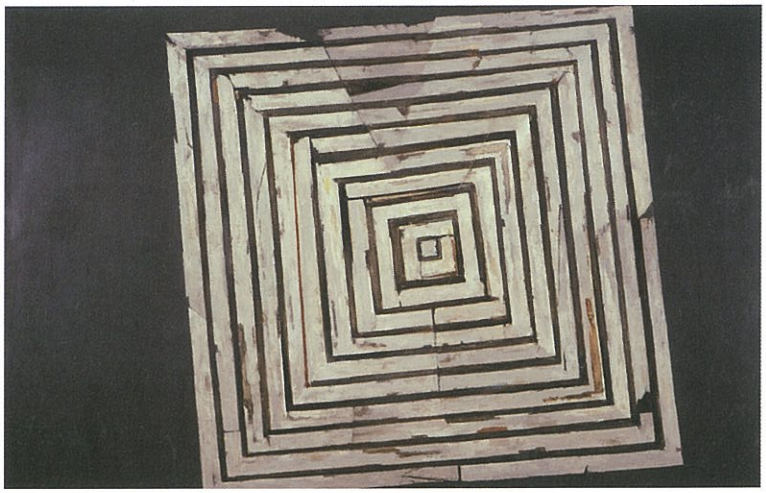
◆画津時代　1960—1977

熊本城の黒の色には、日本の墨の色と同じように精神を感じさせ、西洋の黒の色からは、物とか量を感じさせるものがある。このような事を考えていた昭和35・6年あたりから私の仕事は抽象的な方向にだんだん変わってゆき、構築、構造、形など描き続けてきた。また絵の中に一切見せ場を作るまいと思ったのもこの頃であった。幾百年も前からの先祖が優れた形を残して精神を伝えてきたのを、現代の私達は、現代の目と心で確かめ残してゆかねばならないと思うのである。それは私達の風土から生まれ創られるものであって、その地方独自の個性豊かなものであることである。

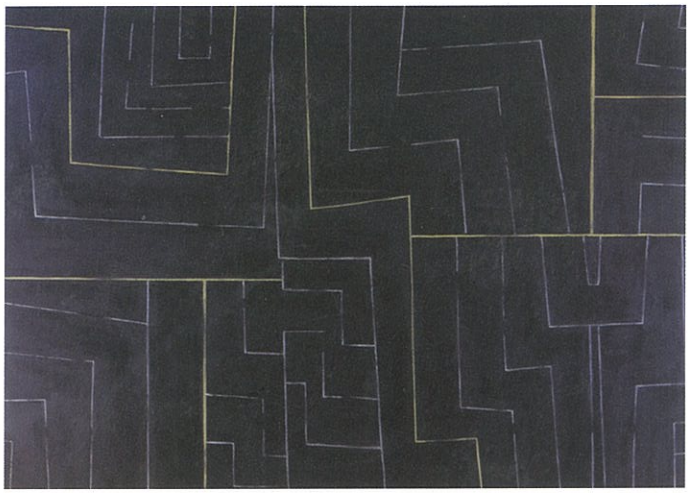
平均文化の今日、伝統ある地方独自のものなどは、中々に生まれにくい、いつの場合も流行がそれを邪魔しているようである。伝統とは即精神であると私は考えている。

《作品2（形）》1965年／画津時代
一般財団法人杏仁会寄託





《形》1965 年／画津時代



《黒の構成》1976 年／画津時代

◆戸島時代　1978—1987

沈黙の錬金術（抜粋）ル・フィガロ紙　1983 年 6 月 24 日

画家は沈黙あるいは吐露から大きく距離をとったり、あまりとらなかったりして、作品を練り上げる。その作品では、世界への反応と、様々な感情の動揺をほとんど感知させないが、その代わりに、リズムの、充実の、空虚の永続性に、あるいは影にも光にも敏感である。

痕跡、畝溝、葉脈、形態が整理され、厳格で単純なイマージュになっている。密やかな魅惑をたたえたそのイマージュは、薄茶色、黒ずんだ褐色、黒、灰色、青、白、赤、黄の色彩の動きの中に滑るように動き、流れをかえる。

その推移によって、すべてを引き出す色彩の錬金術！沈黙はすべてを含み込み、身体をぶるっと震わすほど、あまりにも力強い。

一枚一枚のタブローは、その目的が絶対の、瞬間の表現を探求することであるかにみえる魔術師によって構築された、さながらひとつの小宇宙のようだ。

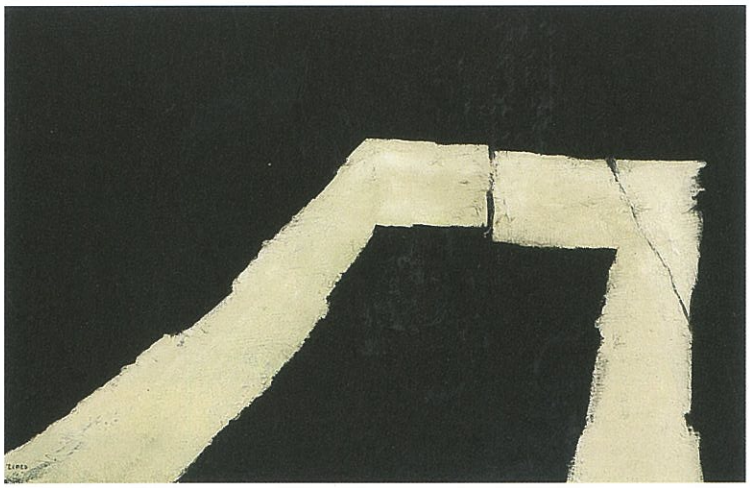
観客は先入観なしに、この秘められた作品の中に入ってゆき、そこで、一歩一歩進んでゆかなければならない。この内的な空間では、変質や変形やある推移が、われわれの日常触れる世界とは無縁のもうひとつの世界へ向かう目覚めの前触れを現わしている。

それは感覚が精神につながるもうひとつの世界である。芸術を醜いものにする残りくずを、次々と剝ぎ落してしまい、われわれを魅了つくすこの芸術は、盛装や化粧の領域とのあらゆる関わりを、ついに裁ち切ってしまった。

禁欲的探究のすえに、坂本の作品は、あなたがたを束の間の漂流に誘い込む。それは感覚で捉えられる世界のような形態の世界である。

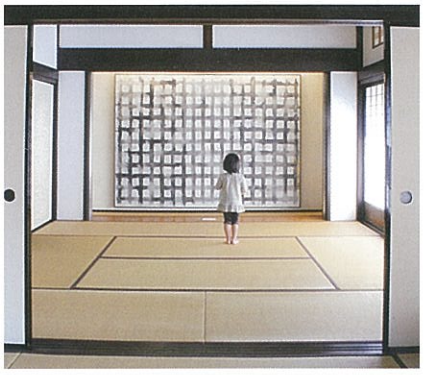
1995 年 坂本善三美術館発行図録『坂本善三美術館』より

《空間へ》1978 年／戸島時代



《城》1981 年／戸島時代

坂本善三美術館 案内



開館：平成 7 年（1995）10 月

〒869-2502　阿蘇郡小国町黒渕 2877　TEL／0967（46）5732

開館時間／9：00 — 17：00（入館は 16：30 まで）

休 館 日／月曜（祝日の場合は開館、翌火曜休館）、年末年始

※臨時休館や展示替え休館があるので要確認。

入 館 料／一般 500 円（400 円）、大・高生 400 円（320 円）、

中・小生 200 円（150 円）　※（　）は 20 名以上の団体料金

※熊本市内から自家用車で約 1 時間 40 分。

※美術館から車で 5 分程度のところに「鍋ヶ滝」がある。

詳しくは坂本善三美術館 HP をご参照ください。（http://sakamotozenzo.com/）